（コーディネーター　田端　和彦　専門委員）

兵庫大学の田端でございます。よろしくお願いいたします。改めまして、ご挨拶申し上げます。私は兵庫大学副学長ということで、専門委員でもありますが、同時にホスト役をさせていただいております。これは、矛盾するわけではなく、兵庫大学は、東播磨地域における唯一の高等教育機関といたしまして、ひとづくり、まちづくり、しごとづくりに邁進しております。皆さまもこれを機会に、兵庫大学に足を踏み入れていただきまして、何らかの学生との交流でございますとか、ご助言等もいただけましたら、大変嬉しく思っておりますので、よろしくお願いいたします。

さて、お時間もないものですから、私の方から本日冒頭にございました、４つの活動報告について、少し触れさせていただきたいと思います。子ども観光大使以下、４つの活動のご報告があったわけですが、「資源」と「課題」という風に整理して、内容をご紹介いたしますと、一番はじめの子ども観光大使の皆さまからは、資源としては、まさにこの地域の加古川ですとか、かつめしとか、地場に皆さまが当たり前に思っているものが資源だと。しかし、課題としては、それの情報の発信力であるとか、あるいは、パンチのあったPRの仕方、加古川タワーという言葉が出ていましたけれども、こういったパンチのあるPR力がないのではないか、というのが課題だと出されました。続きまして、県立東播工業高等学校機械科の皆さまからは、資源としては生産現場がある、それから生産現場を見に行くことができる、こういう風なところが、資源だろうと。ただし、課題としましては、今回参加された皆さまは、先生から言われたという話でしたけれども、高等学校、あるいは、学校現場に民間企業が、いかに入り込んでいくのか、そこら辺がまだ不足しているのかなと、おそらくそこが課題なのだと感じました。神戸学院大学人文学部人文学科矢嶋ゼミの皆さまからは、神吉町における里山保全づくりということで、資源としましては、里山が持っている自然、あるいは、歴史といった、複数の里山の資源がある。ただし、課題としましては、世代間のギャップと言いますか、参加しない世代の方もおられるとか、こういったところが出てきたということでございます。最後の兵庫大学健康科学部看護学科の皆さんには、資源ではなく、課題から入っていただきました。全国的にも、大きな課題である高齢化の問題で、2025 年問題を取り

上げて、特に老老介護の問題、認認介護の問題ということで、認知症の部分においても、周辺症状というものを、いかに緩和できるかが課題であるということを挙げていただいて、資源として何があるかということで、兵庫大学があると言ってくれました。兵庫大学でこういった講座をやっています。こういったものが大きな資源であると、彼女たちが語ってくれました。こういったところが報告の概要だったわけですが、報告を踏まえてですね、８つのグループに分かれていただきまして、ワークショップをやっていただきました。１時間程度という大変短い時間でございまして、こちらにありますとおり、まとめていただいたわけでございます。そのなかには、おそらく司会の皆さんの大変なご苦労といいますか、工夫といいますか、そういうものが見られました。あるグループでは、テーマをきちっと分けて、テーマ毎に議論しましょう、という風にされているところもございましたし、地域別にどのような魅力があるか、課題があるか、ということをされているところもございました。司会の皆さんが疑問をぶつける形で話を進めているところもあれば、逆に、テーマを与えて、内容を引き出そうというところもあったというのが、ワークショップを見ての感想でございます。ファシリテーションの問題、特に短い時間でファシリテートをやるというのはやはり難しいなと、改めて感じた次第です。

もう１つ、ワークショップを見ていて、感じたことがあります。皆さんのグループで「若い人」「若者」という言葉が出なかったグループありますか。ございませんね。おそらく、全てのグループで、若者が考えて、若者にどういった風にしていただいたらいいか、議論に出てきたと思います。皆さんのお手元に、兵庫県がつくりました「兵庫の地域創生」の冊子があると思います。お手元開けていただけますでしょうか。それを開けていただいた、２枚目ですね。「兵庫のすがた」のすぐ次、「ひょうごで活きる」で、いきなり出てくるのが学生、若者であります。つまり、兵庫県も若者に大変期待しているということであります。当然ながら、そういったこともあって、若者という言葉が出てきたのだろうと思います。では、若者に対して、どのように接されましたか。特に、本日は世代間の逆転もございますから、若い人が言っている内容とよく物事を理解されている年齢を重ねた方の言っている内容は、違っていたと思います。どういう風に話を上手く進められてきたのか、ちょっと気になりながら拝見させていただきました。

ところで、今見ていただいております、学生、若者のところでは、山崎さんの名前がでています。NPO 法人「生涯学習サポート兵庫」の設立者でありますが、今度兵庫大学で講義をやります。皆さんのお手元にチラシを入れております。

さきほど、ファシリテートは難しいと言いましたが、社会人向けのファシリテートのやり方を彼がしゃべってくれます。若者とどうやって対話をしていけば良いか、若者の意見をどのように生かしていくのか、説教するのではなく、自分たちの持っている知恵や知識をどうやって若者たちに継承していくのか、ということを考える一つのきっかけになればと思っています、という風に宣伝で終わらせていただきます。

ということで、時間は少しオーバーいたしましたが、これから皆さまのディスカッションの内容をご紹介いただきます。時間が３分以内ということで、２分 30 秒で１回の鐘を鳴らします。３分で２回の鐘を鳴らしますので、そこで終わりということになります。原則は、おられる席で立っていただきますが、どうしても前でやりたいという方は、さっと前に出て来てください。よろしくお願いします。それでは、Ａグループの【暮らしづくり】の発表からお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

（Ａグループ【暮らしづくり】）

私たちは、安全安心をテーマに意見を出し合いまして、そのなかで３つのキーワードが出ましたが、特に自然災害について、具体的に考えていきました。自然災害を考えたときに、コミュニティ不足、少子高齢化、資源等の問題がありますが、コミュニティ不足の問題について、具体的にお話しましたので発表します。

私は、おばあちゃんと別に住んでいまして、もし地震が起きたときに、一人暮らしをしているおばあちゃんを誰が助けてくれるのか、祖母の隣に住んでいるお姉さんは、チョコレートを持って来てくれたり、親しくしていただいていますが、自分の生命も危機的状況にある中で、全然知らないおばあちゃんまで助けてくれるのか、不安なところです。この不安を解消するために、どうすれば良いかということで、普段から近所付き合いしていくこととか、コミュニケーションを取っていくことが、大切ではないかという意見が出ました。それは、思いやりとか、心の問題も関わってくると思いますが、具体的な対策として、例えば、子どもたちが夏休みにしているラジオ体操を、普段の朝からしてはどうか。ほかに、公園掃除はどの地域でもあると思いますが、皆がせっかく集っ

ているので、飲み会とか、お話をしたらどうか。私たちが小学生のとき、知らない人に声を掛けられても、付いて行ってはいけません、という話を聞かされていましたが、近所の人に挨拶をしていくこと。町内会の活性化、コミュニティをどんどんつくっていくこと。普段から声掛けを実施していくことによって、もし何かがあったときに、助けてくれるという風に考えました。最終的には、普段からコミュニケーションを周りの方と取っていくことが重要ではないかというお話をさせていただきました。

（Ｂグループ【暮らしづくり】）

安心して、暮らせる地域について話し合いました。まず、問題点として何があるのか、意見を出し合ったところ、大きく分けて、①環境、②人の暮らし、③人の交流の３つの意見が出ました。そのなかで、人との交流に関する意見が多く出ましたが、環境の問題としては、JR と山陽電車のアクセスが悪いとか、道路が狭いとか、バスが少ないという移動手段に関する問題がたくさん挙がりまして、病院への直通バスを運行するとか、移動販売をするとか、移動手段の支援が必要だという意見になりました。暮らしの問題としては、高齢者の一人暮らしが増えている、町内会活動における高齢者の参加が少ない、ゴミ捨て等が挙がりまして、地域の見守り体制をつくるとともに、ご近所の支援が必要だという意見になりました。これらの支援をするために、人との交流が大切になります。

さきほど申し上げましたが、人との交流が、議論を重ねているなかで、最も多く出ました。人との交流の中で、まず問題点から挙げたところ、人間関係の希薄化が一番の問題という意見になりました。したがって、顔の見える環境を構築することが大事です。顔の見える環境の構築のためには、イベントが効果的ではないかと考えます。例えば、神吉山ウォーキングイベントや子どもたちを積極的に呼び込むために、楠を加工して、カブトムシを捕るイベントです。そして、なぜそのような関係ができないのかという点について、交流のなかで責任を持ちたくない、持たないという人が増えたと思います。したがって、このような責任を持ち合えるように、互いに仲良く、助け合える環境をつくることが必要です。

また、人との交流のなかで、高齢者問題も出てきまして、高齢者が元気になるには、人に教えることが元気になる要素になりますので、子どもたちと触れ合える場をつくること、世代間の幅広い交流が大事だと思います。このためには、他人に関心を持つ必要があります。他人に関心を持つ場として、コミュニケーションの場をつくることも必要になります。また、このような場を新設するのではなく、空き家を利用するのも１つのアイデアだと考えます。そして、これらの取組を広告し、多くの人に知ってもらい、結果として、人々が安心して、暮らせる心地いい地域づくりにつながると考えます。

（Ｃグループ【人づくり】）

楽しいまち【人づくり】のテーマをもとに、地域・人づくりというキーワードで考えました。地域づくりをしていくためには､地域 PR が必要であり、地域 PR をしていくためには、マスコットキャラの活用とか、地域のシンボルとなるものを活用していかなければならないという意見になりました。

人づくりの面では、子どもを育てようという視点で考えました。高齢者が、子どもに自然体験を教えて、自然に触れてもらうことで、地域に何があるのか、知ってもらうきっかけになるとともに、伝承されることになります。また、公園でボールを使用禁止にする地域もありますが、子どもが外で元気良く遊べませんので、防球ネットを張ること等で、子どもが元気に暮らせるように、公園を変えていこうという意見になりました。また、若い世代が一緒に遊ぶことで、子どもは喜びます。そして、子どもが喜ぶと、若い世代も達成感があることから、若い世代が子どもを育てるという意見もありました。

（Ｄグループ【人づくり】）

【人づくり】のテーマは、どのような将来像を展望し、若者が様々な活動を継承できる地域を構築できるかというキーワードですが、【暮らしづくり】【まちづくり】【活力づくり】全ての土台になるのが【人づくり】です。まず、小中学生に興味を持っていただ

き、地域を好きになってもらう。そして、東播磨地域に残っていただき、就職していただくことをスタンスに考えました。そのために、地域を知ることが必要になってきます。例えば、東播磨地域は工場がたくさんありますので、オンリーワン企業もあると思いますが、そういうものに興味を持たないと、地域に残っていきません。そのために、多世代カフェ、職業体験、高齢者と関わるイベント、企業見学会が必要であると思います。私の体験談になりますが、中学生のときにトライやるウィークが実施されて、受け入れ先がうどん屋でした。職人がたくさんいるなか、活動することで興味を持って、高校生から大学３回生まで、そこでアルバイトをしました。地域に対して興味を持ってもらう意味で、職業体験が必要であると思います。また体験談になりますが、過去に子ども会で地域の高齢者と囲碁ボールを楽しみました。私たちも教わることがありますし、高齢者も活力を持ってもらえるように、地域の活性化という意味で良いと思いました。こういうものを、どうやって伝えるかですが、近年皆さん広告をあまり見ないので、ツイッターとか、SNS を使った発信をしていくことが課題であると思います。

（コーディネーター　田端　和彦　専門委員）

ここで、コメンテーターから、４グループのコメントを短めにお願いしたいと思います。金澤副知事からお願いします。

（コメンテーター　金澤　和夫　兵庫県副知事）

ありがとうございました。私は、どちらかというと、コメンテーターというよりも、地域創生の責任者でありますが、そういう立場から言うと、今取り組んでいる地域創生は、「若い人が地域のなかに段々少なくなっていく」「人口が少なくなっていく」「それを何とかしたい」「子どもたちが大勢生まれ、育つようにしたい」「若い人たちを引きつけるようにしたい」という思いで取り組んでいます。色んな活動のなかで、「そこに住んでいる人たちが、より幸せに暮らせるようにしたい」という思いもありますが、むしろ、それを対外的に発信していって、「若い人たちを引きつけるようにしたい」あるいは「積極的にここに住んで、結婚して、子育てするようにしたい」「そういう人たちを増やしていきたい」という風にも思っています。４グループから発表していただきましたが、どちらかというと、こ

こに住んでいる人目線の発表ではありましたが、そのなかに「対外的に発信する」「外から引きつける」という材料が含まれているような気がして、興味深く、おもしろく聴かせていただきました。

特に、印象に残ったのは、専門的な言葉でよく言われる「ソーシャルキャピタル」です。地域の持っているコミュニティの力とよく言われますが、地域のつながりとか、人と人との関係の濃さとか、そういうものがあれば、災害に強い、お年寄りを支える力、地域全体の魅力も高まっていきます。そして、その第一歩は「挨拶」です。地域のなかで、挨拶が頻繁に行なわれるコミュニティというのは、全てのベースであり、ソーシャルキャピタルの力が強いと言われています。地域のコミュニティの強さ、挨拶とか、日頃からの近所付き合いとか、そういうものの大事さを、３つのグループから指摘されたような気がしましたのは、心強く感じます。

（コメンテーター　相川　康子　専門委員）

短い時間のなかでの発表、大変でしたね。「若い人」という言い方はあまり好きではないのですが、まぁ一般的な傾向として、若い人はLINEやSNSで仲間内でだけつながれば良いと考える人が多いようです。ですが、今日の集まりでは「多世代とつながりたい」「地域のこと、足下のことを知りたい」という発言が次々と出て、このような人たちは“絶滅危惧種”かと思っていたので、嬉しく思っています。では、地域のことを知るには、どうすれば良いでしょうね？　「きっかけ」と「仕掛け」が重要です。きっかけに関して、先ほどの発表のなかにも「イベントを開く」という意見がありましたが、楽しいイベントだけで良いですか。「魅力」を発見して好きになっていく関わり方もありますが、逆に「このまま放っておくと、地域が大変なことになるので、少しでも何かできないか」と課題から始まる関わり方もあります。第一部で発表された兵庫大学の認知症への取組は、まさにこのパターンでしたね。イベントに参加して楽しませてもらうというきっかけだけでなく、何かに刺激を受けて「自分にできることはないか」を考え始めるような、そんなきっかけもあるのではないかーということが１点です。それから「仕掛け」の話ですが、これには、人とお金が必要です。皆さんのご発表で「面識社会をつくる」は共通していたと思いますが、里山に

しても、空き家にしても、多くの人が「自分なんかが関わってはいけないのではないか」と思っているのではないでしょうか。「持ち主がいるのに」とか「昔からのコミュニティのなかに新参者は入ってはいけないのではないか」とか。だから「新しい自分たちだけの場がほしい」みたいな感じになって、場がいくつもできて、結果、管理や調整ができずにバラバラのまま、というパターンが多いのです。そうならないように、多様な人が関わる仕掛けが必要です。仕掛け人は、大人かもしれないし、学校の先生かもしれないし、課題に気づいた若い人かもしれませんが、仕掛ける人をどう確保するのかが、次の課題かなと思います。本日のワークショップで「仕掛けが必要だ」というところまでは認識できましたので、次は「誰が、どのように仕掛けるのが効果的か」という実践論に持っていきましょう。この話は、SNS でバーチャルに発信するだけでなく、リアルな現場体験とのバランスをどう組み立てるかとかの話になってきます。「空き家を使う」という発表は、時間がなく詳細は伺えませんでしたが、面白いアイデアですね。今ある資源を、それも上手に関われていないものを“開く”ことで、新しいアイデアが出てくるかもしれません。次のグループ発表で、どんなアイデアが出てくるのか楽しみになってきました。

（コーディネーター　田端　和彦　専門委員）

　ありがとうございました。【暮らしづくり】と【人づくり】について、絞った形でコメントいただきました。後半部分にも、まとめてコメントいただきますので、よろしくお願いいたします。続きまして、Ｅグループ、お願いいたします。

（Ｅグループ【まちづくり】）

　まず、「【まちづくり】に、何が欠けているのか」という点で話し合いました。そのなかで、一番大きく出た意見として、地域のなかの関わりやつながりが、少なくなっています。さきほどの発表で何度も出てきましたが、これが一番です。次に、さきほどのコメントにもありましたが、お金がなければ、どうすることもできません。町おこしをしたくても、イベントを興せないし、人も雇えません。また、地域に関わりたい若者も、もしかしたらいるかもしれません。少なくなっているかもしれませんが、参加したい人を、町内会がどうやって引き込むか、その引き込むため

のきっかけづくりを、自治会が行なっていかなければいけないというのが、【まちづくり】に欠けていると思います。そして、きっかけをつくって、情報を発信して、住民が【まちづくり】に関わっていける環境をつくっていくことが大事だと感じました。そのなかで、「地域の【まちづくり】の理想が見えていない」「どういう風に進めていくか見えていない」という若者の意見がありました。地域の魅力をどうやって伝えていくか、若者がイベントを起こすのか、引っ張っている世代が理想を見せて、若者を参加させていくのか、【まちづくり】といっても、色んな形がありますが、では、【まちづくり】をしていくなかで、どういったことをしていけば良いかというと、地域に関わりたい人をどうやって関わらせていくか、というきっかけを大きくつくっていこうという結論になりました。このきっかけをつくるのは、若者でも、町内会を引っ張っている方でも良いですので、個人で周りに広げていければと思います。

（Ｆグループ【まちづくり】）

どのような将来像を展望し、取り組めば、環境への関心が高い地域を構築できるかというキーワードをもとに、まちづくりのコンセプトとして、①残すもの、②蘇らせるもの、③創るものの３つに分けて考えました。そのなかで出てきた例として、水辺やため池、豊かな自然環境、景観保全を残していこうというアイデアが出てきました。次に、駅前商店街の復活、空き家対策等、地域の自然環境保護を蘇らせていこうというアイデアが出てきました。最後に、水辺のプロムナードの作土や安全安心の加古川市を創るということで、防災に関するものをどんどん広げていこうというアイデアが出てきました。その出てきたアイデアのなかで、プログラムを創っていこうということで、イベントの広報活動を継続すること、色んな活動団体と連携していくことが挙げられまして、色んな現状の調査が必要であることが分かりました。最終的な課題は、「東播磨の自然を生かす体験プログラムを創ろう」ということになりました。

（Ｇグループ【活力づくり】）

東播磨地域のイメージは、気候が暖かい、面積が広い、食べ物が美味しい、ものづくり、交通の便が良い、歴史、

ため池、地域の特色を生かした祭りが挙げられます。各市町のイメージとして、明石市は、たこ焼や鯛、東西に長い地域（まち）、魚の棚。加古川市は、高御座、自然、播州ラーメン、加古川駅前ではダンスをしている方も見られます。交通の便が良い反面、交通事故も多いです。高砂市は、かわいいマスコットキャラクター「ぼっくりん」、大阪府や広島県と違うお好み焼きがあります。稲美町は、田舎のイメージがありますが、麦を使ったパンや麺をつくっています。播磨町は、小さな地域（まち）で、お金持ちという意見もありました。まとめとして、ネットワークが発達しているにも関わらず、情報が十分とは思えません。映画になりました「君の名は。」や「風立ちぬ」のロケ地を巡る、聖地巡りを参考に情報発信したら良いと思いました。

（Ｈグループ【活力づくり】）

地域資源を生かした東播磨づくりということで、１つのプロジェクトを立ち上げました。プロジェクトとは、どのようなものか、具体例を３つ挙げます。１つは、「空き家の活用」です。ファッションショーや音楽フェスティバル、クラブ、映画の上映というのが、１つの活用方法です。ほかに、カフェや地域限定のお土産の販売という、いわゆる地産地消の促進につながる活用方法もありかなと考えています。２つ目は、「おしゃれなお店」です。活性化させるためには、若者の力が絶対に必要である、ということで、服やアクセサリーを売ることによって、若者が集うのではないか、と思っています。具体的な例は、アウトレットです。３つ目は、「情報発信の場」です。情報弱者や情報格差と言われていますが、なくすためには、交流の場が必要であると考えています。

このためには、まず、「地域を広範囲から知ること」「広めること」が大切と考えています。そして、地域を見て歩くことによって、地域資源の発見、再発見につながると思います。そして、これをどうするかですが、フィールドワークすることによって、地域の再発見や地域を見たり、知ったりできると思います。

（コーディネーター　田端　和彦　専門委員）

どうもありがとうございました。Ｈグループは、プロジェクトという形でご

報告いただき、ありがとうございました。時間はないですが、一人ぐらいご質問があればいかがでしょうか。矢嶋先生いかがでしょうか。

（神戸学院大学人文学部人文学科　矢嶋　巌　准教授）

１つ思うのは、皆さま自身が地域のことをよく知ること、そして、自分たちの住む地域にも宝があるということに気付くことが大切です。ありとあらゆるものが宝になります。相川先生もおっしゃいましたし、田端先生もよくお分かりだと思います。東播工業高等学校生、兵庫大学生、そして、子ども観光大使もお分かりだと思います。発見していくことで、気づいていくのです。大人も気づいていくことになると思います。ありがとうございます。

（コーディネーター　田端　和彦　専門委員）

どうもありがとうございました。最初にお伺いをなしに、お聞きしましたので、大変恐縮でございます。どうもありがとうございました。今、「発見」というキーワードが出ましたが、会場からの声として生かしていただいて、コメントをいただければと思います。今度は、相川先生からお願いできますでしょうか。

（コメンテーター　相川　康子　専門委員）

後半のグループ発表、ありがとうございました。アプローチの仕方がすごくおもしろかったです。例えば、Ｅグループは「欠けていること」から発想され、Ｆグループは、①残すもの、②蘇らせるもの、③創っていくものという枠組で整理されました。こうすると、世代で意見が異なる点もありますが、よりはっきり見えてきますよね。まちづくりの会合では「昔は良かった」という思い出話になってしまいがちなので、まず優先順位をつける、という手法は、議論を一歩進めるうえで有効です。地域ビジョン委員である年配の私たちも見習わなければならない視点だなと思いました。ただし、東播磨地域では、この①残すもの、②蘇らせるもの、③創っていくもの、というフレームでも良いかと思いますが、ほかのもっと人口減少が進んだ地域の場合は、「止める」も含めた検討が必要になってくる場合もあります。辛いですけど、人材も、お金も乏しくなる中で、本当に大事なものは何なのかを絞り込んでいく作業です。例えば、従

来は毎年やっていた行事を隔年にしようとか、ほかの地域と一緒にやろうとか、外部に委託するとか、手がかからないようにしていく。思い切って止めてしまい、その余力を大事な課題に集中するという選択もあるでしょう。東播磨でも５年後、10 年後には、そういう発想で地域を見ていく必要があるかもしれません。

幾つかのグループで「知ること、広めること」がキーワードとして出ました。このためには、どうすれば良いでしょう？　１つは発表の中にあったフィールドワークです。そしてもう一つ、これは話題にならなかったのですが統計分析です。昨年の国政調査のデータも、ぼちぼち公表されて、まもなく小地域単位で分析できるようになります。今日は「多世代交流」とか「子どもを軸にしたまちづくり」の提案が沢山でましたが、統計をみると実は子どもがいる世帯は、どんどん少なくなっていて、結婚しない人や結婚しても子どもがいない世帯が相当多いことに気付かれるはずです。それを嘆くのか、あるいはこの人たちー子どもがいなくても多くの知恵を持っていたり、時間的に余裕があったりする人たちーを、今後まちづくりに巻き込む手法を考えて行くのか…これが次の課題ですね。どんな人が、どんな状況でまちに住んでいるのかを統計から探った上で、潜在資源を活用するという前向きな姿勢で考えて行くことが大事です。

また「町内会」の話も出ました。若い世代が多いなかで、町内会や自治会の話が出るのは珍しいと思いますが、これも地域によって状況は異なります。加入率がほぼ 100％で、次々と後継者がいる地区もあれば、加入率は落ちているし、役員も高齢化して「私の代で終わり」という厳しい地域もあるでしょう。この問題も発想の転換が必要です。「後継者をつくる」と簡単に言われますが、今の自治会役員さんとか、民生児童委員さんのような献身的な動き方ができる人は、もうそんなにいらっしゃいません。一人暮らしだったり、老老介護をされていたり、経済的な問題もあったりして、とても今の役員さんのように多くの時間を地域活動に充てるなんてことはできないという人が大部分でしょう。であれば、地域の役員の仕事も棚卸をして整理していく必要がある。この部分はこの人にしかできないが、これは新住民にもできる、学生にもできる、とか。会合を減らせば、サラリーマンでも自治会長ができる、とかスリム化していかないと、今の活動スタイルのままでは、引き継ぐことは難しいと思います。今日は短い時間でしたので、この活動の見直しまではできなかったのですが、ぜひそんな発想で考えていっていただきたいと思います。ありがとうございました。

（コメンテーター　金澤　和夫　副知事）

私も、今の発表のなかで、「地域の資源」「宝物」「知る努力」「発掘する」「知る」そして「それを大勢の人たちに伝える努力」、SNS という新しい手段がありますが、多くの皆さんが言及されたと印象に残りました。私自身は、仕事をしていて、実感することは、我々が持っている魅力を掘り起こして、伝えることは大事ですが、それだけでは不十分で、その魅力をもっと魅力あるものにするための一工夫が色んなところに実はあって、まだまだ我々自身できていないじゃないか、という問題があります。例えば、皆さんどこで食事しようか、というお店選びをするときに、値段が安い、ものが美味しい、それだけで店選びをしていないですよね。店の雰囲気が良いとか、どういうお客さんが来ているとか、サービスしてくれる人の応対が良いとか、季節限定商品があるとか、有名人が来ているとか、些細なことではあるでしょうけど、色んな要素を考えて、店選びをしていると思います。私自身もそうです。そういうことを考えると、兵庫県、あるいは、東播磨に住んだり、働いたりする場所、あるいは、子育てする場所として選んでもらうかどうか、これは一人ひとりの選択です。どういう選択をすることもできるなかで、あえて、兵庫県、あるいは、東播磨を選んでもらうためには、一つ一つの細かい工夫を積み重ねていく必要があるのではないか。まだまだ見落としているものがあるのではないか。子育て支援制度をつくりました。「この支援制度を受け取る人の気持ちにマッチしていますか」「使いにくいところ残っていませんか」ということを振り返ってみたりする。例えば、企業誘致で、「良い工業団地ありますよ」と言うのは簡単ですけど、実際に、企業の側から、相手の側から見て、立地しようとしたときに、子育て環境はどうなっていますか、従業員の人は気になりますよね。そこまで目配りした形の子育て環境込みの企業誘致をしているか、そういう振り返りをすることが大事と思っています。その辺りまで、突っ込んでいただいた発表は、残念ながら聴かせていただけなかったような感じがしています。

明石焼きが B-1 グランプリで一番になりました。全国一番になるからには、何か一工夫も、二工夫も、３つも、４つも色んな工夫をしているはずです。キャップをかぶったり、一食分として出す量も結構コツがありますと言っていました。焼きそばと比べると、明石焼き３個の方が、取っつきやすくて、手が出やすいとも言っていました。色んな工夫があるはずです。「くまモン」がゆるキャラで一番になったのも、理由がないことではなくて、単なるゆるキャラでなくて、目が細くて、憎たらしげで、動作がきびきびしている。まさに、つくったものです。ほかのゆるキャラと違います。売り込むときも、地元の熊本県ではなくて、大阪府で売り込みました。その方が、発信力があるからです。いくらお金をかけるにしても、熊本県でゆるキャラの PR 費用をかけるのと、大阪府

でかけるのを比べると、大阪府でかける方が、効果が高いということでやったそうです。しかも、単なるPRでなくて、ある日突然失踪して、全国手配をかけるような仕掛けをしたり、要は、話題のためにこのようなことを山ほど盛り込みました。そっくり真似しなくてもいいですが、我々が抱えている課題を取り組むときに、一工夫、二工夫、もうちょっと突っ込んで考えたら、もっと良くなるじゃないかという、それを見いだす努力をしたいなと、これは我が身に振り返っての話でもあります。

地域創生は、トップダウンでやれば良い話ではなくて、それぞれの地域が良くならないと、人口回復とか、定住とか、就職とか、実現できないので、そういう意味では、本日発表していただいた皆さんのようなそれぞれの地域のなかで、取り組む人たちを必要としています。これからも色々議論していただいて、こういう場で我々にお伝えいただいて、力を貸していただければ、大変嬉しく思います。最後になりましたが、ありがとうございました。

（コーディネーター　田端　和彦　専門委員）

どうもありがとうございました。お時間のない中で、後半部分の発表をまとめていただきました。私から本日の感想を含めて、お話をさせていただこうと思います。１時間という短いワークショップのなかで、様々なテーマについて議論いただきました。このなかで、印象に残ったのは、何々を「する」という言葉です。さきほど、相川先生から「知る」とか、「広める」とか、あるいは、「止める」という言葉もありました。矢嶋先生から「発見する」という言葉もありました。ワークショップの中でも「挨拶をする」とか、「参画する」とか、「交流する」とか、「する」という言葉が色々出てきたと思います。こういうワークショップをすると、まず、課題を見つけて、解決の方向性を見つける、そして、というところで終わりますが、今回、「する」というところまで入ってきたのかな、こういう方向が根付いてきているのかなということと同時に、地域ビジョンという姿が方向性を考えるものから、活動していく段階にシフトしていくものも影響していると思っています。

その上で、「兵庫の地域創生」を見ていますが、13ページ以降に、全県的な行動計画があります。これを見ると、目標は、全部、「する」になっています。「多子型の出産・子育てが可能な世界を実現する」と書いております。ところが、「誰がするか」というところにこれから入っていかなければなりません。おそらく、副知事がおっしゃった、一工夫、二工夫という方法もあるでしょう。そして、大事なことは、副知事がおっしゃった「トップダウンじゃない」ということで、

「皆さん一人一人が、何かすることを考えていかなければならない」ということになっていくだろうと、思っています。本日は、そういうヒントがいっぱい出てきました。さきほど、「する」という活動は、地域ビジョン委員会で色々やっています。そういうところに、持ってきていただいて、または、地域ビジョン委員が人を巻き込みながらするということに、つなげていただければという風に思います。司会が漫然として、５分程オーバーしましたが、コーディネートを終わらせていただきまして、マイクを返したいと思います。どうもありがとうございました。